



くすりと健康

一般社団法人
神戸市薬剤師会

濱口梧陵

はまぐちこうりょう

「はまぐちこうりょう」の名をご存知でしょうか。梧陵は雅号で、今の和歌山県有田郡広川町出身の実業家・政治家（1820～1885）で、醤油醸造業（現・ヤマサ醤油）の当主として七代目濱口儀兵衛を継承し、江戸末期から明治にかけて生涯多岐にわたり活躍した人物です。

1853年、アメリカのペリーが蒸気船の軍艦4隻で浦賀に現れ、日本は大慌てでした。幕府やら朝廷やらいつていられない事態に、日本が大きく変わるうとしていました。

翌年の1854年「安政南海地震」が発生し広川町も被災しました。梧陵は家業のある銚子から出身地に暫く出向いていて遭遇したのです。いま防災でよく言われている「南海トラフ巨大地震」のひとつです。海沿いの広川町ではおおよそ100年毎に海洋の災害に見まわられており1585年、1707年

と2度津波に襲われていました。

梧陵の手記に、このときの地震と津波の様子が詳しく書かれています。初め大きな余震があり、翌日安心していると前日よりはるかに大きな本震があり津波が襲いかかり、また翌日大きな余震があり、暫くは余震が続ぎ、村は地震と津波で大災害を被るのです。

梧陵は人格者の祖父五代目儀兵衛から可愛がられその人となりを学び、将来の当主として子どもころから努力し励みました。そして培われた梧陵の手腕がこの災害で発揮されました。人を動かす束ねる生かすを瞬時に判断し行動しなければ、人心は離れていくというトリアージの概念です。そして、この村の将来を計画しなければならず、梧陵は持てる力を発揮しました。私財を投じて、家を無くした者には家を建て、橋を造り、将来おこるであろう津波に備え大防波堤を築いたのです。お上ではなく、いち民間人がやったのです。「稲むらの火」として知られるこの災害は、後にラフカディオ・ハー

ンの「生ける神」にも語られ、まんが日本昔話でも放映されました。

いつかおこるであろう「南海トラフ巨大地震」に備え、濱口梧陵記念館・津波防災教育センター「稲むらの火の館」の訪問をお勧めします。予想される津波の被災地地図に、この神戸の名前を見つけてました。

梧陵は日本の大転換期の先を読み資金は惜しまず、文武両道を兼ね備えるため若者に剣術槍術教育を奨励したのです。佐久間象山、勝海舟、福沢諭吉などと面識がありました。とにかく前向きで学問好きな梧陵なので、16歳年下の坂本竜馬と接点があったかも…なんて私の楽しい妄想です。漫画「J-1-N-1」に、濱口儀兵衛は登場します。実際、梧陵は焼失した種痘館を再興し、江戸のコレラ大流行対策にも力を尽くし医学の発展に貢献しました。

明治16年、梧陵65歳で念願の世界旅行に出かけ、ニューヨークでまさしく旅立ったのでした。（東灘区 鹿嶋）